
消去天使クリア！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消去天使クリア！

【Zコード】

Z5906C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

どいか氣分屋な俺と自称天使のクリア、そして自称悪魔のペンとの出会い。

それは俺がまだ、自分のことを

「僕」と呼んでいたころの話だ。とある日、俺は両親に連れられて知らないところへやつてきた。重苦しい雰囲気が立ち込める部屋を抜け出し、俺は近くの公園へと向かつた。そこで、一人の女の子が泣いており・・・事情は忘れたが、女の子を助けてあげた。それから・・・十年がたつた。

自称天使、現る

いいづなみ
飯縄身高校二年三組出席番号拾弐番 律咲蒼。

それが俺の名前であり肩書きでもある。

自分で言つとあれだが・・・気分屋だ。

趣味は読書に昼寝とプラモの組み立て、後は・・・まあ、他にも色々と多彩な趣味を持つている。

彼女はおらず、悲しいことに年齢といしない暦は一緒だ。

家族構成は父が一人・・・名前は律咲健次郎に母が一人。

名前は律咲早苗、ペットの犬名前はジェニファが一匹と・・・まあ、こんなもんだ。

あと、親戚の娘・・・律咲理恵が家に住んでいる。

自分の部屋を持つことは我が家では許されておらず・・・今のところその親戚の娘と同じ部屋だ。なんでも、その両親がトレジャーハンターをしているらしく・・・小さい頃から俺の家に預けられるうちに面倒を見ることになつたそうだ。お人よしの我が両親にはほとほと、呆れたりしたりもするが・・そこが尊敬すべき点であろう・・・。

「母さん、今日の晩御飯は何かな?」

「うふふ・・・健次郎さんの好きなとんかつよ

「それは早く帰つてこないと蒼に食べられてしまつなあ・・・」

「・・・・・」

「こんなやり取りをしている両親を見ながら俺と理恵は朝食を静かに食べる。俺は静かな場所が好きだ。別にこの一人のラブラブ熱光線（きっと、赤道直下に違いない）を浴びるほど日光浴は好きではない。きっと、理恵もそんなことを思つてはいるのだろう。

「じゃ、母さん行つてきます！」

「ええ、いつてらっしゃい健次郎さんーでも、職場は一緒だから私も一緒に行くわ！」

そういうつて出て行つた我が父、我が母を尻目に、俺と理恵は同時に食事を食べ終える。

「・・・兄ちゃん、今日は兄ちゃんが食器を洗う日だつたよね？」
「・・・ちっ、気がついたか・・・そのままそこに置いといってくれ。俺が後でまとめて片付ける」

「そう? それならよろしく・・・」

理恵もこの場所からいなくなり、一階へと上がつていぐ。俺は自分の分の食器を洗つて次に理恵の分の食器を手に取る。母さんの食器と父さんの食器を洗つて食器洗いは終了・・・さて、次は郵便物を取りに行くといふどこの家庭もある仕事だな。

我が家のは朝は早く、俺以外の人たちは朝日が昇つたと同時に目を覚ます。幼い頃から共に生活をしていた理恵もその生活習慣がうつたのか、我が両親と共に起床・・・そして、両親は新聞を見ることがなく、出て行つてしまつ。仕事上、朝早い仕事らしいのでそのことはしようがないのだが・・・せめて、子供に

「いつてきます」ぐらいは言つてもらいたいものだ。
玄関から出て郵便受けを確認する。

この時間帯ならほんと新聞だけなのだが・・以前は理恵をストーカーしていた奴の熱烈な告白文がはいつていたりもしたな。

理恵は気持ち悪がつていたが、俺にはそんな手紙が入つていたこと

が学校の下駄箱であつたこともない。理恵の下駄箱にはぎつしりとラブレターが入っているというのに・・・あのずぼらな理恵が何故、もてるのか俺には理解できないし、理恵に騙されている野郎共の末路を俺は心配してしまうね。実物見ると、きっと幻滅してそのまま幽霊なら成仏するだろ？

「・・・おや、今度は婚約届けの紙が入ってるぞ？理恵の奴、ものすごくもてるんだなあ。相手は誰だろ？まあ、十八歳以上だろ？な？」

「いえ、違いますよ、それは・・・蒼君と私の婚約届です。本日、提出しようかと思っているんですけど？」

「ふうん、俺と・・・ああ、すまん・・・名前を・・・」

声がしたほうを振り返るとそこには二口一口と笑っている俺より少しだけ身長が低い女の子が俺を見ていた。

「・・・誰？」

「えええ！私のことを覚えていないんですか？」

心外そうにそういうが、いきなり

「覚えていないんですか？」といわれても知らないものは知らないし、覚えていないものは覚えていない。目の前にいる魔女つ娘が着ていそうな服を着て白い羽を生やしている女の子が可愛いことは認めよう。だが、事実を認めることと心で認めるとは別物だ。今まで血のつながっていた両親だと思ついたら違う奴だったといわれても信じられん。つまり、俺は目の前の人物を知らない。

「すまん、知らん・・・覚えていないとこの場合は言つたほうがいいんだろうな」

「・・・くすん、ひどいです！私の名前はクリアですよ！」

「・・・クリア・・・お前の名前、クリアなのか？」

「ええ、クリアです！思い出しましたか？」

クリスティンとかのほうが俺的には好きだなあ・・・いや、そんなことをいつている場合ではないない。

「・・・すまん、全然思いだせない・・・」

「そ、そんなあ！私が十六歳になつたら結婚しようつて約束したじゃないですか！」

「・・・？」

俺はまだ、十七歳になつたばかりだ。法律的にまだ、結婚はできないぞ。

「・・・俺はまだ、十七だ。残念ながら結婚できる歳ではないぞ」「しょ、しょんなあ・・・」

「大体、君は何だ？」

「くすん・・・ええと、私はですね・・・」『はきめ台詞だからかつこよく言わなきや！私は『消去天使』です！』

人差し指を天に向け、彼女はそういった。その目は搖ぎ無く・・・しつかりと俺の目を見つめていた・・・かつこいいことは認めるが、鼻水が出ていて台無しだ。

「・・・そうか、よかつたな・・・鼻水、きちんと拭けよ？」

俺はそういうて自宅に新聞を持つてはいった。馬鹿には付き合つていられない。

「・・・ま、待つてくださいよ！普通は『天使なんているわけないだろ？』とか『それなら、証拠を見せてみろ！』とかいいません？」

「・・・ああ、そんな風な展開を希望してたのか？ここはスルーかと思つたんだ」

「そんな！？せつかく心の準備だつてしてきましたね！」

「ああ、それは・・悪いことをしたな。一人でやつていなさいな・・・そんじや、ばいばい」

俺は自宅の玄関の中に姿を消したのであつた。音がしなくなつたので放つておいたのだが・・・

ピンポーン！

「・・・あいつか？」

確認してみると、先ほどの自称天使だつた。まだ、俺に何か用事があるらしく。

「・・・何か？」

「お願いですから、せめて私の力を見てくださいよー！」

「・・・わかった、見せてくれ」

「絶対に自宅にこもらないでくださいね？私のこの大切なステッキで奇跡を起こします！そのクールな面を笑わせてあげます！一つの目をしつかり開けてくださいね？」

「ああ、約束しよう・・・」

俺は自宅の扉を閉めて外に出た。いつの間にか彼女は謎のステッキ（先っちょに巨大な消しゴムがついている）を握り締めてぶつぶつ言っている。きっと、はたから見たらおかしい人だと思われているに違いない。俺としてはあまり関わり合いを持ちたくないんだがなあ。いや、誰も見ていないなら話をしてもいいとは思つてる。

「・・・白き聖なる我が獣よ・・・すべての汚れを消してくれたまえ！」

そういうと、彼女はステッキを振り下ろした。その右腕から発せられた白く聖なる光の先には俺の左手があった。そして、見事俺の左手に直撃・・・俺の左手はきれいさっぱり、なくなつた。血が出ることもなく、その空間から消されたといつたほうがいいようだ。

「・・・ほら！見てください！完璧に消すことができましたよ！すぐじゃないですか？私のこと、思い出して惚れてくれました？」

「・・・ほお、近頃の若者は好きな人の左手を消すことが奇跡なのか？お前のその力が本物であると俺は認めよつ・・だが、俺の左手はその奇跡のせいで消えちまたぞ？」

「あ・・・」

クリアはそういうとおどおどしている。よし、こりは冷静にどうすればよいのか考えよつ。目の前の天使はきっと役に立たないに違いない。終わつた祭りに参加するには一年かかってしまうものや・・

「・・・・消すことができるところとは戻す」ともできるんだろう？」「

「それは・・『消去天使』だから、ちょっと無理ですね 消すこと
が使命ですので・・・」

なんて、役立たずな上に場合によつちや迷惑な天使なんだろうか
？産業廃棄物以下の役立たずさだ。厳しいのではなく、それが現実
だ。

「・・・俺、これから左手なしで生活しないといけないのか？」

そんなことをつぶやく俺の前に、新たな登場人物が現れた。

「・・・影から影へ・・・謎の『落書き悪魔』参上！」

既に、謎ではない・・・俺はそんなことを思いながらも、その相
手を見る。その姿は目の前に突っ立っているクリア（真つ白）を真
っ黒に塗つたような感じだつた。だが、微妙にその雰囲気は大人つ
ぽい・・・そして、胸もクリアより大人っぽい。

「・・・君、名前は？」

「・・・ベン・・・・私が、あなたの消された左腕を書いてあげる」

これまた謎のステッキ（さきつちよには鉛筆がくつついている）
をかざし、何ごとか呪文を唱え始める。その姿に俺は微妙に不安を
抱きながら神に祈る。いや、相手は悪魔だが・・・

「・・・黒き邪なる我が獸よ・・・すべての白紙を黒く塗りつぶ
せ！」

そして、振り下ろす・・・真つ暗な光線が俺の左腕にあたり・・・
俺の左腕は復活していた。

「・・・おお！なんとパーフェクトな左腕なんだ！きっと、ジオ
グの下半身もパーフェクトにかけるに違いない！」

「・・・この道、十六年・・・生まれたときからやつている」

それはまた、紹介文的なことをどうもありがとう・・・このひらの
疑問が出る前に答えるなんていい人だなあ。

「蒼さん、よかつたですね？」

「・・・何がだ？」

「左腕、治つて・・・いやあ、めでたしめでたしですー私の姉さんの
おかげですね。さ、家の中にはいりましょう?」

「・・・ベンさん、どうぞ、俺の家に入つていいでください。なくした左腕のお礼をしたいんです。クリア、お前は入つてこなくていい・・・なくした左腕の代償はでかいぞ？」

「・・・どうも（ぱつ）」

俺は頬を染めている彼女の肩に手を回して（先ほど書いてもひらつた左腕）家中へと姿を消す。

「・・・よければ、この紙にサインをいただけません？」

そういうて俺は右腕で持つていた婚約届けをペンに手渡す。

「・・・あなたのその大きな鉛筆で俺たちの未来を描いてみませんか？」

「ちょ、ちょっと待つてくださいよー私のことは無視ですか？それは私が持つてきたものです！」

そういうて割つてはいつてくる真っ白少女に俺は別に何も感じない・・・いや、正直にいうと・・・迷惑という感情を抱いていた。

「・・・クリア君、君は好きな男の子の体の一部を消すのが好みかね？」

「え・・・そうですよ・・・って、冗談です！そんなことはありますん！」

玄関を閉めようとすると、手に持つていたステッキでそれをまるで悪徳セールスの人をするように間に割り込んでくる。

「おいおい、それは大切なステッキなんだろ？もつと大切に扱えよ！」

「いえ！どうせ代わりはたくさんあるんですから気にしないでください！物は消費するためにあるんですよ！大的にするのは老人だけで充分です！」

結局、家の中に無理やり入ってきたクリアに俺はお茶を出す。

「・・・粗茶ですけど・・・」

「へ、そんなお茶を飲ませないでくださいよー牛乳がいいです！」

「・・・へ、君はどうやら出がらしがそんなに飲みたいようだね？」

「……いえいえ、なんて立派なお茶なんでしょうへ、心が現れるようです」

きつと、醜い心なんだろ？なあ。名前はクリアのくせして……まあ、それはいいや。

「……それはそうと、君たち一人のような非日常の俗物が俺に何かようかな？」

そういうと何故か落ち着き払つたクリア（猫舌なのだろ？か？）まったくお茶には手をつけていない。（）が俺の眼を見る。

「……実は、真剣な話……婚約を迫りに来たんです！」

「……冗談……じゃないよ？だな……ペンもか？」

「……うん……（ぱつ）」

その言葉に俺は唸つた。いや、その言葉を正確に言つなら俺は（やつぱり、結婚するならどう見てもろくなことがないクリアを生涯の道連れにするなら寡黙で優しそうなペンと結婚したほうがいいだろ？）唸つた。

「……待つた！」

「何が待つただ？」

「……これから、一緒に生活して決めてくださいー私、がんばりますからー！」

「……私からもそちらのほうがいいと提案したい……」

「ペンがそういうなら……」

「わ、私はどうでもいいんですか！？」

こうして、俺はあっさりと非日常的な存在の一人を受け入れた。理由？そりや、まあ、その場の気分に押し流されてしまったと思うしかないだろ？……気にしないでほしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5906c/>

消去天使クリア！

2010年10月8日15時08分発行